佳作賞受賞者

佳作賞
「落下する夕暮」
『別冊關學文藝』53号

名村　峻氏

名村　峻（なむら・しゅん）
一九四七年六月十三日、福井県生まれ。神戸市在住。
関西学院大学法学部政治学科卒業。
広告代理店にてコピーライター、CMプランナー、クリエイティブディレクターとして勤務。定年退職後三年間、大学の非常勤講師を勤める。
07年『映画女優に恋して』、09年『映画館』、11年『永遠のキャッチボール』などの小説を自費出版。
12年より「別冊關學文藝」会員。

「落下する夕暮」

菅野明彦は広告代理店を退職した後、大学の講師を勤めている。六十代半ばを過ぎても気楽な独身だったが、最近よく落下する夢を見るようになった。

ある日、近くのホテルで見憶えのある中国人女性を見かける。明彦はその記憶を確かめるため、三十年前に化粧品のCM撮影ででかけた中国ロケの思い出を辿り始める。

初めてのCMを手掛ける明彦ほか日本人スタッフ六名と中国人スタッフ四名は、北京から薬草「ムラサキツユクサ」を求めて北朝鮮国境近くへ、更に「紫色の夕焼け」を追って河西回廊の町敦煌へと向かう。一か月に及ぶ中国横断の旅だった。途中様々な苦労や事件が起きる。現地スタッフの手配ミス、当局による足止め、更には同じ宿舎のイギリス人女性の行方不明事件等々。どうやら同行する監視役の共産党員に関係があるらしい。それでもようやくCMの最重要シーンである「少女の水浴シーン」を撮り終えた。

ゴビの砂漠を移動しながら明彦は打ちのめされていた。CMのテーマ「自然に寄り添って　人は美しく生きる」という机上でひねり出した言葉など消し飛んでしまうほどの、余りにも広大で荒々しい自然と、未開だが変わりつつある中国の姿だった。

一方で、出発前、明彦は小さな息子のいる編集者の玲子と親しい関係になり、いずれ共に暮らすことを望んでいた。玲子とはロケ先からも連絡を取り合っていたが、中国大陸を目まぐるしく移動し、黄河を遡り、砂漠を旅するうち、明彦の意識に微妙な変化が生じていた。次第に日本が遠く感じられ、玲子との絆も砂漠の蜃気楼のように朧気なものになっていく。

一行は黄河上流の遺跡を撮り終え、北京への帰途に就こうとするが、これまでも度々あった中国人スタッフのミスが発生し、飛行機ではなく、蘭州から北京へは三十六時間もかかる列車での移動となった。その車中、眠りに落ちた明彦は、行方不明の女性こと、月牙泉での水浴シーンを演じてくれた少女のことなど、夢うつつのように思い巡らす。黄河で目にした岸壁から転げ落ちる羊たちを数えながら、明彦はまるで終わりの無い旅に向かっているような気がしていた。

ようやく帰国したものの、明彦が抱いていた不安どうり、玲子がアメリカの元夫の許へ去ってしまっていた。

三十年後の今、目の前にいる女性の記憶が甦る。彼女は遥か昔、敦煌の月牙泉で水と戯れていた妖精のような少女だった。だが、明彦はあえて声をかけなかった。

●これまでの受賞者・受賞作（前に続く）

第六回＝浅田厚美「はづかし病」
佳作＝**天野律子**「ぬくい闇」
木村誠子「海を渡る蝶」

第七回＝北原文雄「秋彼岸」
佳作＝**田中　青**「送る日の雨」
森沢周行「瓦礫のなかから」

第八回＝島田奈穂子「ナナフシ」
佳作＝**今野奈津子**「色にさわる」
葉山ほずみ「ブラッディウェーブ」

第九回＝飯田未和「彷徨える」
佳作＝**岩代明子**「用意するにこしたことはない」
南　奈乃「べた踏み坂」
美月麻希「鳩の血」

第十回＝小畠千佳「雨やさめ」
佳作＝**橘　雪子**「その向こう」
稲葉祥子「筆談の妻」
後藤康子「母娘餅」